卒業論文報告書

「情報化する化粧　－細分化する理想と高まる編集能力」

本論文では、化粧に関する詳細な変化を追うことで、化粧やその周りで人々に起きた変化を明らかにする。人とコミュニケーションを取る中で重要な役割を持つ化粧に、近年大きな変化が起きている。SNS が普及する以前、人々はどのように化粧に触れ、学んでいたのか。そして今、化粧品とそれを学び使う人々にいかなる変化が生じつつあるのかを調査した。

第 1 章では、誕生から日本が消費社会となるまでの化粧の歴史を述べている。初めは、自然条件から肌を守るといった実用的な目的のために用いられていたが、地域や文化によって異なる気候風土や、自然環境の違いによる化粧方法の違い、政治・経済・社会・文化・宗教との関わりのなかで、それまで行われていた化粧が発展し定着した時代を経て、やがて自己表現の手段として用いられるようになっていった。

この過程で、化粧は経済的弱者が強者に対して優位に選択されるために存在していた。例えば家庭の中では妻が夫に対して化粧を行うように、貴族など支配層にいた男性も自身より目上の天皇に対して化粧を行ったという過去もある。

1960 年代以降、日本が大量生産大量消費の社会へと変化していく中で、化粧品もその影響を受け、用途やその仕上がりなど、少しの違いによって様々な種類の化粧品が売り出された。その後 1980～1990 年代前後に、各化粧品メーカーがこぞってキャンペーンを展開していく中で女性の間で美に関する共通の意識・価値観が共有された。日本が消費社会となり女性の社会進出が進む中で、化粧品によって新たな女性像が表現されるまでに、化粧は女性の象徴となった。

第 2 章では異なる世代に化粧との接点を聞き、人々が化粧にどう向き合ってきたのかをインタビューした。その結果、学生が化粧を学ぶ場所が変化していったことがわかった。雑誌や広告が主だったが、インターネットや SNS を利用して様々な化粧品と出会える仕組みが作られた。現在一人一人が情報を吟味し、取捨選択した上で、「自分に一番合うもの」を購入している。情報の発達により自分を知る手段ができ、さらに、多くの情報の中から自分の求める情報だけを選び取って組み合わせる「編集能力」が高まっているといえる。

第 3 章ではインターネット登場前に化粧を学ぶ手段として主に用いられていた雑誌の分析を行う。雑誌『non-no』における特集を、創刊から 2019 年までを 10 年ごとに分けて計 24 冊の研究をした。中でも特集ページに注目し、使用される化粧品や化粧方法、使われている言葉などの変化を追うことで、各時代において女性がどのような化粧をしていたのか、女性たちの追い求めた理想とはどのようなものだったのかを調査した。その結果、かつては流行がパターン化していて、「知的で女らしい」、「エレガント」、「スポーティー」というように、化粧の仕上がりのイメージを一言で表すことできたものが、現在は化粧品の種類が増えたことによって、人々の理想がいくつかのパターンに収まるということがなくなった。流

行は多方向へと向かっていき、それぞれにとっての理想の自分が細分化していったことがわかる。

第 4 章では、スマートフォン登場以降の化粧の現在を述べる。一人一台スマートフォンを持つようになった社会において、若者たちは以前とは全く違う方法で化粧を体験しているのだ。コスメサイト、SNS、YouTube などの新たな媒体を通して語られている化粧の現在について考察し、現在若者の間で高まる化粧への情熱とはどのようなものなのかを論じる。

自分より目上の者に優位に選択されるため、異性にモテるため、自分の理想とする姿に近づくため。化粧はその当時の社会の背景や化粧をする者の置かれた立場によって、他人のため、自分自身のために行われてきたといえる。インタビュー調査や雑誌研究をもとにすると、近年は、自分自身のために化粧を行う人がほとんどであるが、この「自分のための化粧」の意味はかつてと今とでは違うものとなっている。先行研究によれば、化粧は女性の社会進出を象徴付け、化粧によって新たな女性像が表現されるまでに、女性たちの「自立」を後押しした。しかし、今日では「自立」や「社会進出」という意味は薄れた。現在の「自分のための化粧」は単に「自分の見た目を変える」ということを意味しているのだ。かつて他者の存在を意識し、その影響を受けながら化粧を行っていた女性たちだが、現在は、化粧を行う前提としては他者の存在は重要ではない。化粧をした自己がインターネットや SNS を介して、拡散し共感されるように、化粧は新たな他者とのコミュニケーションを生み出すためのものとなっているのである。

会計報告

・文献費
参考文献リスト記載の文献
雑誌『non-no』
雑誌『LDK』等
・交通費
自宅から国立国会図書館までの往復費